

# 集合論ノート 0013 Nice name.

近藤友祐 (@elecello\_)

初稿: 2018/10/07 修正: 2018/10/15

この文書の場所: <https://elecello.com/works.html>

本稿では、特に断りの無い場合、 $M$  は ZFC の ctm,  $\mathbb{P}$  は poset とし、 $\mathbb{P} \in M$  を仮定する。

**定義 1.**  $\tau \in \mathbf{V}^{\mathbb{P}}$  とする。  $\vartheta \in \mathbf{V}^{\mathbb{P}}$  が  $\tau$  の部分集合に対する nice name であるとは、 $\vartheta$  が

$$\vartheta = \bigsqcup_{\sigma \in \text{dom}(\tau)} (\{\sigma\} \times A_\sigma) \quad \text{where 各 } A_\sigma \text{ は } \mathbb{P} \text{ の反鎖} \quad (1)$$

の形をしていることをいう。ただし、各  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  について、ただ一つの  $A_\sigma$  が対応しているを考える。□

**注意 2.**  $\vartheta$  が「 $\tau$  の部分集合に対する nice name」であっても、 $\vartheta_G \subseteq \tau_G$  とは限らない。例えば、 $\tau = \{\langle \mu, q \rangle\} = \{\mu\} \times \{q\}$ ,  $\vartheta = \bigcup_{\sigma \in \text{dom}(\tau)} (\{\sigma\} \times A_\sigma) = \{\mu\} \times A_\mu$  で  $A_\mu = \{r\}$  のときとか。但し  $r \in G$ ,  $q \notin G$  とする。このとき、 $\{\mu_G\} = \vartheta_G \not\subseteq \tau_G = \emptyset$  となる。□

**補題 3.**  $\mathbb{P} \in M$ ,  $\tau, \mu \in M^{\mathbb{P}}$  とする。このとき、 $\tau$  の部分集合に対する nice name  $\vartheta$  で、

$$\mathbb{1} \Vdash \mu \subseteq \tau \rightarrow \mu = \vartheta \quad (2)$$

なるものが存在する。すなわち、どんな集合のどんな部分集合に対しても nice name がつけられる。

*Proof.* 各  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  に対し、 $A_\sigma \subseteq \mathbb{P}$  を (i)  $A_\sigma$  は  $\mathbb{P}$  の反鎖, (ii)  $\forall p \in A_\sigma (p \Vdash \sigma \in \mu)$ , (iii)  $A_\sigma$  は (i)(ii) のようなもののうち  $\mathcal{P}(\mathbb{P})$  で極大、となるように作る。

**Claim 1.** これは可能。

[ $\cdot$ ]  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  を固定せよ。まず、 $B_\sigma := \{p \in \mathbb{P} : p \Vdash \sigma \in \mu\}$  と定める。定義可能性補題より  $B_\sigma \in M$  である。 $\mathcal{A} := \{A \in \mathcal{P}(B_\sigma) : A \text{ は } \mathbb{P} \text{ の反鎖}\}$  と定める。 $\emptyset \in \mathcal{A}$  なので  $\mathcal{A} \neq \emptyset$  である。 $\mathcal{A}$  が  $\subseteq$  に関する極大元をもつことを示す。そのために鎖  $\mathcal{C} \subseteq \mathcal{A}$  を勝手に取る。 $\mathcal{C}$  が  $\mathcal{A}$  に上限を持つことを示す。それは  $A^* := \bigcup \mathcal{C}$  である。何となれば、まず  $A^* \in \mathcal{A}$  を示す。 $A^* \subseteq B_\sigma$  は明らか<sup>\*1</sup>。  $A^*$  が  $\mathbb{P}$  における反鎖であることを示すために  $p, q \in A^* (p \neq q)$  を勝手に取る。 $A^*$  の定義より、ある  $A_1, A_2 \in \mathcal{C}$  が存在して  $p \in A_1, q \in A_2$ 。  $\mathcal{C}$  の全順序性を用いて  $A_0 := \max\{A_1, A_2\}$  とすれば、 $p, q \in A_0 (= A_1 \text{ or } A_2)$  である。 $A_0$  は  $\mathbb{P}$  における反鎖なので  $p \perp q$  を得る。 $A \in \mathcal{C} \implies A \subseteq A^*$  なので上限性は明らか。以上より、 $\mathcal{A}$  の任意の鎖が  $\mathcal{A}$  に上限を持つことがわかった。よって  $M$  の Zorn の補題より  $\mathcal{A}$  は極大元をもつ。それを  $A_\sigma (\in \mathcal{A})$  とせよ。これが所望のものである。というのも、(i) は  $A_\sigma \in \mathcal{A}$  から明らか。(ii) については  $A_\sigma \subseteq B_\sigma$

<sup>\*1</sup>  $x \in A^* = \bigcup \mathcal{C}$  なら、ある  $A \in \mathcal{C} (\subseteq \mathcal{A} \subseteq \mathcal{P}(B_\sigma))$  が存在して  $x \in A$ 。  $A \in \mathcal{P}(B_\sigma)$  より  $A \subseteq B_\sigma$ 。  $x \in A \subseteq B_\sigma$  より  $x \in B_\sigma$ 。

であり,  $B_\sigma$  の任意の元は  $\sigma \in \mu$  を force するのでよい. (iii) は, もし  $A_\sigma^+ := A_\sigma \cup \{q\}$  ( $q \in \mathbb{P}$ ) が  $A_\sigma$  の真の拡大であつて (i)(ii) を満たすなら, (ii) より  $A_\sigma^+ \subseteq B_\sigma$  であることと (i) を合わせて  $A_\sigma^+ \in \mathcal{A}$  である. すると  $A_\sigma \subsetneq A_\sigma^+$  で, これは  $A_\sigma$  の  $\mathcal{A}$  における極大性に矛盾.  $\square$ (Claim 1)

これらの  $A_\sigma$  ( $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ ) を用いて, 求める  $\vartheta$  は

$$\vartheta = \bigsqcup_{\sigma \in \text{dom}(\tau)} (\{\sigma\} \times A_\sigma) \quad (3)$$

で表される. これを見よう. 示すべき式  $\mathbb{1} \Vdash \mu \subseteq \tau \rightarrow \mu = \vartheta$  は,  $\Vdash$  の定義により, 「 $\mathbb{1}$  を含む任意の generic filter  $G$  による generic 拡大  $M[G]$  でコレコレが成り立つ」と同値である.  $\mathbb{1} \in G$  は常に満たされるので, 結局, 任意の generic 拡大  $M[G]$  でコレコレが成り立つことをいえばよい.  $M[G]$  を任意の generic 拡大として,  $M[G] \models \mu_G \subseteq \tau_G$  を仮定する (want:  $M[G] \models \mu_G = \vartheta_G$ ).

$\boxed{\mu_G \supseteq \vartheta_G}$   $a \in \vartheta_G$  を勝手に取る.  $(\cdot)_G$  の定義より, ある  $\langle \sigma, p \rangle \in \vartheta$  が存在して  $a = \sigma_G$ ,  $p \in G$  が成り立つ.  $\vartheta$  の定義より  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ ,  $p \in A_\sigma$  である.  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  に対する  $A_\sigma$  の定義の (ii) の条項により,  $p \Vdash \sigma \in \mu$  を得る.  $p \in G$  と真理補題より  $\sigma_G \in \mu_G$ , すなわち  $a \in \mu_G$  を得る.

$\boxed{\mu_G \subseteq \vartheta_G}$   $a \in \mu_G$  を勝手に取る. 仮定  $\mu_G \subseteq \tau_G$  と合わせて  $a \in \tau_G$  である. したがって, ある  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  が存在して  $a = \sigma_G$  である. この  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  を固定する. poset に関する一般的事実\*2より, (A)  $G \cap A_\sigma \neq \emptyset$  であるか, (B)  $\exists q \in G \forall p \in A_\sigma (q \perp p)$  である. (B) の場合. この  $q \in G$  を固定する.  $a = \sigma_G \in \mu_G$  なので, 真理補題より,  $r \Vdash \sigma \in \mu$  なる  $r \in G$  がとれる.  $G$  の filter 性より,  $s \leq q, r$  なる  $s \in G$  がとれる. 拡大補題より  $s \Vdash \sigma \in \mu$  である  $\dots$  (\*\*). いま  $A_\sigma \cap G = \emptyset$  なので,  $A_\sigma^+ := A_\sigma \cup \{s\}$  は  $A_\sigma$  の真の拡大となっている. (i)  $A_\sigma^+$  は  $\mathbb{P}$  の反鎖である:  $p \in A_\sigma$  たちは incompatible なので,  $s$  と  $p \in A_\sigma$  が incompatible であることを確かめればよい. もしも共通拡大  $\mathbb{P} \ni t \leq s, p$  があれば  $t \leq s \leq q$  と合わせて  $q \not\perp p$  となるが, これは (B) に反する. (ii)  $\forall t \in A_\sigma^+, (t \Vdash \sigma \in \mu) : A_\sigma$  の元についてはよいので  $t = s$  のときを調べればよいが, これは (\*\*). 以上より  $A_\sigma^+$  は  $A_\sigma$  の真の拡大で (i)(ii) を満たすので, これは  $A_\sigma$  の極大性に反する. よって (B) は起こり得ない. したがって (A) である. このとき元  $p \in G \cap A_\sigma$  が取れる.  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  に注意すれば  $\langle \sigma, p \rangle \in \{\sigma\} \times A_\sigma \subseteq \vartheta$  となり,  $\langle \sigma, p \rangle \in \vartheta$  である.  $p \in G$  なので  $\sigma_G \in \vartheta_G$  となり,  $\sigma_G = a$  だったので  $a \in \vartheta_G$  を得る.  $\square$

**補題 4.**  $\tau \in \mathbf{V}^{\mathbb{P}}$  を固定し,  $\kappa := |\mathbb{P}|$ ,  $\lambda := |\text{dom}(\tau)|$ ,  $\mathbb{P}: \theta^+$ -cc,  $\kappa, \lambda, \theta \geq \aleph_0$  とする. このとき,  $\tau$  の部分集合に対する nice name は  $\kappa^{\lambda \cdot \theta}$  個以下しか存在しない.

*Proof.* まず  $\theta < \kappa$  の場合.  $\aleph_0 \leq \theta^+ \leq \kappa$  なので [5] Lemma I.13.19 の諸公式が使える.  $\theta^+$ -cc より, 反鎖は  $|\kappa|^{<\theta^+} = |\kappa|^{<\theta^+} = |\kappa|^\theta = \kappa^\theta$  個以下しかない. nice name を一つ定めるには, 各  $\sigma \in \text{dom}(\tau)$  のそれぞれについて反鎖を選べばよい. よって nice name の総数は函数  $\text{dom}(\tau) \rightarrow (\mathbb{P} \text{ の反鎖たち})$  の総数のことだから,  $(\kappa^\theta)^\lambda = \kappa^{\lambda \cdot \theta}$  個以下.  $\theta \geq \kappa$  の場合.  $\theta^+$ -cc より, 反鎖は  $|\kappa|^{<\theta^+} = |\kappa|^{\leq \theta} = |\kappa|^{\leq \kappa} = |\mathcal{P}(\kappa)| = 2^\kappa$  個以下なので, nice name の総数は  $(2^\kappa)^\lambda$  個以下である.  $(2^\kappa)^\lambda \leq (2^\theta)^\lambda \leq (\kappa^\theta)^\lambda$  なので, これは  $\kappa^{\lambda \cdot \theta}$  個以下でもある.  $\square$

\*2  $M$  が ZFC の推移的モデルで  $\mathbb{P} \in M$ ,  $E \subseteq \mathbb{P}$ ,  $E \in M$ ,  $G: (M, \mathbb{P})$ -generic ならば, (A)  $G \cap E \neq \emptyset$ , または, (B)  $\exists q \in G \forall p \in E (q \perp p)$  である. 証明は集合論ノート 0010 を参照.

## 参考文献

本稿では、主に [5], Ch.IV, §3 を参考にしました。対応する定理番号の明記は行っていません。

- [1] Devlin, K., *The Joy of Sets: Fundamentals of Contemporary Set Theory* (2nd ed.), Undergraduate Texts in Mathematics, Springer, 1993.
- [2] Jech, T., *Set Theory: The Third Millennium Edition, revised and expanded*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, 2002.
- [3] Kunen, K., *Set Theory, An Introduction to Independence Proofs*, Vol. 102. Studies in Logic and the Foundations of Mathematics, North-Holland, 1980. 邦訳 [13].
- [4] Kunen, K., *The Foundations of Mathematics*, Vol. 19. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2009. 邦訳 [14].
- [5] Kunen, K., *Set Theory* (rev. ed.), Vol. 34. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2011.
- [6] Schindler, R., *Set Theory, Exploring Independence and Truth*, Universitext, Springer, 2014.
- [7] Shoenfield, J.R., *Mathematical Logic*, Addison-Wesley, 1967.
- [8] Takeuti, G. and Zaring, W.M., *Introduction to Axiomatic Set Theory* (2nd ed.), Vol. 1. Graduate Texts in Mathematics, Springer, 1982.
- [9] Weaver, N., *Forcing for Mathematicians*, World Scientific Publishing, 2014.
- [10] 新井敏康, 数学基礎論, 岩波書店, 2011.
- [11] 菊池誠, 不完全性定理, 共立出版, 2014.
- [12] 倉田令二郎・篠田寿一, 公理的集合論, 倉田令二郎監修・数学基礎論シリーズ 2 巻, 河合文化教育研究所, 1996.
- [13] K. キューネン (藤田博司訳), 集合論-独立性証明への案内, 日本評論社, 2008. [3] の邦訳.
- [14] K. キューネン (藤田博司訳), キューネン数学基礎論講義, 日本評論社, 2016. [4] の邦訳.
- [15] 田中一之編・著, 数学基礎論講義, 日本評論社, 1997.
- [16] 田中一之編, ゲーデルと 20 世紀の論理学 4 集合論とプラトニズム, 東京大学出版会, 2007.
- [17] 田中一之・鈴木登志雄, 数学のロジックと集合論, 培風館, 2003.
- [18] 田中尚夫, 公理的集合論, 現代数学レクチャーズ (B-10), 培風館, 1982.
- [19] 田中尚夫, 選択公理と数学-発生と論争、そして確立への道 (増訂版), 遊星社, 2005.